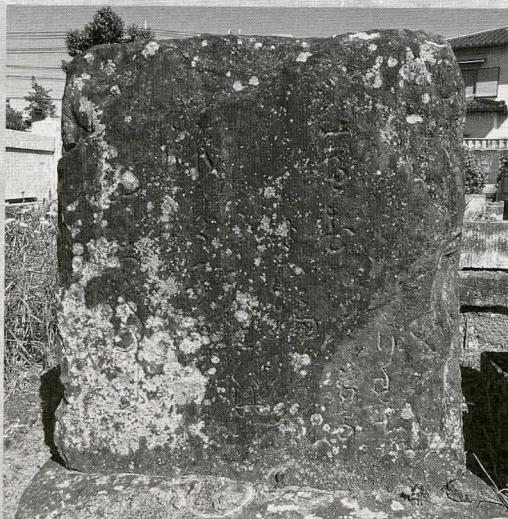


香取遺產

問生涯學習課
六(50)
1224

(Vol.122)



▲持宝院跡の観音堂

▲前原共同墓地にある恒丸の墓碑

た。通称を与右衛門といい、名を一といいました。「恒丸」は俳号で、この他に石巖山人、葛斎などの号があります。

恒丸は42歳の時に家督を息子に譲り、諸国行脚に出かけます。やがて江戸浅草川に移り住むようになりますが、文化3年（1806）に寓居が火災に遭ってしまいます。これを機に、下総小南（現香取郡東庄町小南）の青野太第の勧めで、佐原の篠塚六兵衛方に身を寄せ、浜宿の延寿寺隣の持宝院に「葛斎」という草庵を造つて住むようになりました。延寿寺・持宝院も今はなく、その跡地である千葉萌陽高校駐車場には、持宝院を偲ばせる観音堂が祀られているのみ

同時代を代表する俳人小林一茶とは、多くの句集に名を連ねるなど、互いに認め合う仲であつたといわれています。恒丸が亡くなる1年前には、佐原の葛斎庵を「茶が訪ねています。墓碑には恒丸の辞世の句である「蘆花半輪これ俳諧の一大事」が刻まれ、碑の背面には「石巖山人葛斎翁碑」と題した久保木清淵の撰文による碑文が刻まれています。墓碑の傍らには、妻で俳人の素月尼（今泉もと）の墓石が寄り添うように建てられています。

恒丸は文化7年（1810）9月、佐原の葛斎にて60歳で没します。佐原在住はわずか4年ですが、この期間に、宗匠として下総地方を中心に4000人の門人を育てたといわれています。

となっています。